

大分県スポーツ学会第2回ワークショップ報告

今回のワークショップのメインテーマは「おおいたコーチングサミット—本学会は指導者に対していかなる貢献ができるのか—」であった。とかく、スポーツサイエンスをめぐっては「現場の見えていない研究」との批判が向けられがちである。では、スポーツサイエンス（本学会）はいかなるスタンスを持って指導者との関係を構築すべきなのか。

上述の趣旨を踏まえ実施された今回のワークショップは実りあるものであった。研究者と指導者によって展開されたディスカッションにおいては、「指導者は研究者の知見を期待していること」「研究者は指導者との関係性をより緊密なものにしたいと願っていること」を確認しあうこととなった。要するに、研究者と指導者間には、「牽制」にも近い「間」（はざま）が存在してきたのである。

今回のワークショップを契機として、本学会への積極的な指導者の参加・参画が期待されよう。実は、「指導者」もたえず選手をみつめ、試行錯誤を繰り返す「研究者」に他ならないのである（基調講演者森丘氏）。第2回ワークショップは、「スポーツに関心を寄せる多くの県民が集える学会」（森会長談）に向けた第一歩であったといえよう。

（文責：学術委員会副委員長 谷口勇一）